松本市教育研修センターだより

No.44　令和７年11月30日

「子どもが主役」の学校づくり、温かな対話の力

１１月は、松本の城下町、ICT、実践校に学ぶ（丸中 Jr.学会）、ミドルリーダー研修など、多岐にわたる学びの場がありました。今号では、特に「教育哲学」と「ファシリテーション」に焦点を当てます。西郷先生の「子どもの声を聴く」あり方と、ちょんせいこ先生の「対話を引き出す」スキル。どちらも「子どもが主役」の学校づくりへの熱いエールです。実りの秋、先生方の学びの様子をお届けします。

ファシリテーション力向上　見て、体験して、次は自分が！

１１ 月7日（金）に「ファシリテーション研修」を実施しました。

株式会社ひとまち代表のちょんせいこ先生を講師として実施しているこの研修は、毎年高評を博していますが、今年は梓川小学校の協力を得て、講師の先生による6年生への授業実践の参観が実現しました。

実践授業では、子どもたちがファシリテーション、特にホワイトボードと「オープン・クエスチョン」による対話活動により、温かく豊かなコミュニケーションを深めていく様子を目の当たりにし、参観者がその有効性を深く実感する時間となりました。また、子どもたちの関係を紡ぐ、ちょん先生の温かな言葉がけも、大きな学びとなりました。

授業後、会場を移して、体育館でワークショップを実施。前半は、授業実践での子どもの学びを講師の先生の導きにより、先生たち自身が追体験しました。後半にはペアでの対話を通して温まった先生方が小グループに分かれ、「発散・収束・活用」の観点を意識しながら本日の研修での学びを振り返りました。

当日は、約 60 名の校外からの参加者に加えて、会場校の先生たちを合わせて約 90 名が研修に参加されていましたが、子どもたち同様、先生たちはホワイトボードに互いに対話の言葉を書き留めながらコミュニケーションを深め、広い体育館が柔らかな熱気に包まれた研修会となりました。

ちょんせいこ先生はワークショップの中で次のように話されます。

「対話を深める力は『スキル』。使うほどに上達する。すべての子どもを『打席に立たせてあげること』が大切。」
「ミーティングの成否はファシリテーターの力が3割、サイドワーカー（参加者）の力が7割。サイドワーカーがファシリテーションの経験を持つことで『幸せな対話』が生まれる」

先生の言葉通り、学級づくりや校内研修づくりに活かせるファシリテーションの有効性を参加者が心から実感する研修となりました。

【参加者のリフレクションより】

- **オープン・クエスチョンを使用することで聞かれた人はよく思考して答えるため、会議が深まることを実感できた。ホワイトボードを使って全員の意見を短時間で可視化したり、質問の技を使うことによって、サイドワーカーの力を引き出せるようにファシリテーターの練習を教員間でも授業でも行いたい。**
- **自分が生徒をファシリテートすることしか考えていなかったが、ちょん先生の「生徒をファシリテーターにする」という発想と授業にハッとしました。ホワイトボードミーティングの手法も初めて学びましたが、中学校の教科の授業でも活用できるかもしれないと思いました**
- **ファシリテーションってなんだろうというところからのスタートでしたが、6年生の授業での活発な意見交換の様子を拝見して、感激しました。活発な児童はもちろん、おとなしそうな児童も質問カードを確認しながらホワイトボードに夢中でメモをしている姿がとてもいいなと感じました。…早速どこで使えるか、考えながら研修を受けていました。**

『子どもが主人公の哲学』～学校づくり実践編～

教育哲学研修（リーディングスクール・ラボ2に続いて実施）

この度、元世田谷区立桜丘中学校長の西郷孝彦先生をお招きし、教育哲学研修を開催しました。リーディングスクール・ラボ2に引き続き、ラボ参加者とオンラインによるハイブリット形式での開催です。西郷先生は、2010 年から 2020 年まで同校の校長を務められ、「校則がない、制服もない、無理に授業に出席する必要はない」といった、一見難しいとされることを、公立中学校で実現されました。その結果、学校は区内トップレベルの優秀校へと育ち、「日本一自由な公立学校」と呼ばれるようになりました。

最も印象的だったのは、参加された先生方の深い気づきです。「一人一人子どもにはストーリーがあり、個に合わせてものさしを変えることが大切なのではないか」「学校のものさしに子どもが合わせるのではなく、子ども一人ひとりに合わせる必要がある」こうした声の根底にあるのは、学校観の転換です。これまでの「子どもが学校に合わせる」という発想から、「学校が子どもに合わせる」へのシフト。それが、この講演会を通じて、多くの先生方の心に刻まれたようです。参加者からは「もっと続きが聞きたかった」という声も多く、真摯に自らの教育実践に向き合う先生方の姿勢が感じられ、本当に素敵な時間となりました。

【西郷孝彦先生のご講演より】

1、まずは、子どもの声を聴こう

「子どものやりたい」を大切にしながら、「先生のやりたい」も大切にする。そのためには、心理的安全性のある職場が不可欠。その4つの要素が「①話しやすさ（リスクなく率直な意見が言える） ②助け合い（困ったときはお互い様という意識） ③挑戦（チャレンジを歓迎する） ④新奇歓迎（個性を発揮して活躍できる）」

2, 新自由主義（能力主義・競争原理）に陥っていませんか？

「良い子」の定義を問い直す必要がある。「勉強ができる、明るく返事ができる、先生の言うことを素直に聞くことができる…」。そんな「できる」子を「良い子」と見ていないだろうか？ 学校では「できる」人が良い子と見やすい傾向がある。「100 点でなくも、自分が努力して取った 60 点を認める」という視点が大切。

3, 子どもの命をまもること（不登校やひきこもりは命の問題）

長期休み明けなどに「学校に行きたくない」と悩み自殺をする子。桜丘中学校では、先生がゲートキーパー（あの大人だけには話そう）という存在になれればと願い、9月と 12 月に「ゆうゆうタイム」という時間を放課後設け、自分が話したい先生のもとを訪ねて対話する取組を行った。生徒に人気のある先生は、決して「授業がうまい」先生ではなかった。生徒は、その先生が好きになると、自然とその教科も好きになっていった。

4, 学校をユニバーサルデザインに

「特別な配慮が必要な子どもたち」にとって過ごしやすい環境は、「すべての子どもたち」にとってもすごしやすい。桜丘中学校に、音声から文字を理解するためにタブレットが必要な生徒がいた。その生徒が「学校にタブレットを持ってきたい」と申し出たことをきっかけに、生徒全員のタブレット持参を認めることにした。

【参加者のリフレクションより】

・・・・生徒一人ひとりの物語に、寄り添う教師の在りようを西郷先生の生き方やお考えから学ばせて頂きました。公立校では、「できない・難しい」と思ってしまっていることが、自分の中にあること。…「当たり前」と思っていることにもう一度、ダウトをかけて、生徒の「やりたい」を真ん中に置いた学校づくりに向けて、今、私にできることを考えたり、発信したりし続けたいと思いました。もっともっとお話を聞いていたい気持ちになりました。

・西郷先生のお話をお聞きして、私の中の凝り固まった価値観が崩れていく感覚がありました。学校が変わっていかないと不登校や自ら死を選んでしまう子どもが減っていかない。…公立の学校だからこそどんな個も子も受け入れる環境を創っていかなくてはならないと感じました。…そのためにはやはり個とじっくり向き合うことが大切だと感じました。学校のものさしに子どもが合わせるのでなく、個に合わせて尺度を変えられる社会が、皆が大切にされ、生きやすい社会なのだと思いました。